

文化の扉

高畑勲 ホンモノ求めて

子ども向けとされていたアニメーション映画にリアリズムと社会的なメッセージを盛り込み、めざましく進化させたのが高畑勲監督だ。アニメーションの革命家は何を考えていたのか。没後1年、早くも本格的な回顧展が開かれる。



© 2013 絵巻所 Studio Ghibli-NDHDMTK



© 1994 絵巻所 Studio Ghibli-NH



© 1991 脚本 宮崎 高畑 監督 Studio Ghibli-NH

- 1935 10月29日、三重県に生まれる
- 59 東京大学仏文科卒業、東映動画入社
- 68 「太陽の王子 ホルスの大冒険」演出
- 74 「アルプスの少女ハイジ」演出
- 76 「母をたずねて三千里」演出
- 88 「火垂るの墓」監督
- 91 「おもひでぽろぽろ」監督
- 94 「総天然色漫画映画 平成狸合戦ぽんぽこ」監督
- 99 「十二世紀のアニメーション」
- 「ホーホケキョ とんりの山田くん」監督
- 2007 「漫画映画の志」
- 13 「かくや姫の物語」監督
- 18 4月5日、死去

「ちがうわ！ わたしは誰のものにもならない！」

かくや姫(右)「かくや姫の物語」

「かくや姫を現代女性だと仮定してみるとどうだろうか。(中略)相手だけが頼りの結婚生活、待つ女、すべて堪えがたいことばかりではないだろうか」

企画書から(「アニメーション、折りに触れて」所収)

「山はオラたちの棲み処。勝手になくさんでもらいたい！」

おろく婆(左下)「総天然色漫画映画 平成狸合戦ぽんぽこ」

「狸の話をしているようでいて、同時に人間の話もしていたつもりなんです。(中略)狸であると同時に人間なんですよ」

上映会での講演から(「芸芸別冊 高畑勲」所収)

「田舎の景色ってやつはみんな人間がつくったもんなんですよ」

トシオ(左)「おもひでぽろぽろ」

「タエ子を田舎に行かせ、生き生きと農業に生きているひとりの青年と出会わせる。(中略)自己を対象化できる最も基本的な試金石は(中略)田舎にある」

演出ノートから(「映画を作りながら考えたことII」所収)



「十二世紀のアニメーション」



研究と取材は、高畑勲監督のキーワードだ。開発の進む近郊の山で「棲み処」を奪われたタヌキが人間に戦いを挑む「平成狸合戦ぽんぽこ」では、タヌキの生態を徹底的に調べた。都会の27歳の女性が山形市の農家で紅花栽培を手伝う「おもひでぽろぽろ」では、有機農業を営む



日本の文学とアニメーションを研究する米村みゆき専修大教授は「近代の文学では、娘は親の勧めで結婚を避けて自由な恋愛をするのが定型でした。ところが、かくや姫は恋愛という制度からも自由なのが面白い。高畑勲監督は現代のジェンダー論をかなり研究されたと思像しています」と話す。

社会性+娯楽 考えさせるアニメ実践



高畑勲監督を戦後民主主義者の一人と考えるのが山本昭宏・神戸市外国語大准教授(日本近現代文化史)だ。戦争体験から軍国主義を否定し、個人の主体性を尊重する。だが、戦後の社会運動には「ぽんぽこ」のタヌキのような挫折もあった。「民衆の願いに根ざしていなければ運動は長続きしない。高畑勲監督は丸山真男らの知識人が見向きも



評論家 宮崎哲弥さん

兄妹の視線の先は

青年に詳しく話を聞いている。研究者気質は、アニメーション以外にも及んだ。数多くの著作を残し、中でも中世の絵巻物を研究した「十二世紀のアニメーション」では、「伴大納言絵詞」をめぐる専門家の論争に参入して自説を打ち出した。親交のあった作家、池澤夏樹さんは一素情らしい映像作家だったので、絵巻物も読み込むことができたのでしよう。フランスの詩人、プレベールの翻訳も一般の仕事でした。高畑勲監督が物語をどの方向にも持って行ける天才なら、高畑勲監督は多才な大秀才だと思えます」と評する。

それだけに内容面でも表現上でも同じようなアニメーションは作らなかった。映像研究家の叶精二さんは高畑勲監督のその姿に、哲学でいう「弁証法」を見る。「正反合」だ。前作を否定しながら、新たな「合」をめざして変わっていった。

高畑勲には、「白い巨塔」「あゝ野麦峠」などのヒットを連発した映画監督・山本薩夫(1910〜83)を想起させる面がある。歴史性や階級性を物語に生かしながら、面白さの追求をおろそかにしなかった。高畑ら日本のアニメーションの興隆の一因は高い設計性だった。意図が隅々にまで及ぶ映像には、ハリウッド映画に近い魅力があった。この明快な舞台なら、思想性を含んだ物語を乗せても娯楽作品として展開できるという確信が持てたのでしよう。

訪ねる

「高畑勲展」は2日から10月6日、東京・竹橋の東京国立近代美術館。高畑の演出法に着

目して構成(03・5777・8600)。高畑が過去に構成・演出した人形劇「まほろばのこだま」も7月18、19日に追悼公演として座・高円寺2で上演される。かわせみ座(03・3315・8102)。

(編集委員・村山正司)